メキシコ低地マヤ地域におけるカトリック的宗教文化統合の実証的研究
―マヤ・ユカテカの一カトリック村落マニにおける奇跡を材料として（2）―

A Study of Catholic Culture Integration of Lowland Maya Communities in Mexico
― with Reference to Miracle Works in a Maya Yucatecan Catholic Community, Mani (2) ―

中別府　温　和

小論の目的は、マヤ・ユカテカの一カトリック村落マニにおける宗教的文化統合のあり方を、奇跡という視点から解明することである。

宗教的文化統合は仮説的概念である。「宗教が文化の中心に位置していて、その文化のある部分を濃く、ある部分を弱く色づけている」と仮説的に考えて、社会を調査し分析していくために作成されている。この仮説に立つことによって、宗教現象の諸特性を時間感覚、空間感覚、心的過程、社会構造、政治経済的態度などの視点から具体的に分析し、宗教現象の科学的解明を試みる。

本稿では、宗教現象の一つである奇跡を、調査地マニの人々の病気治療という視点から聴取調査し、そこに信仰がどのように関わっているかを分析した。その結果、カトリック村落マニにおいては、病気治療、エチソ（邪術）、家禽類や家畜の病気治療にメン（呪医＝祭司）が深く関わり、そこでの病気治療とエチソ（邪術）に関連して奇跡が語られることを明らかにした。また、これらの領域におけるメンへの社会的信頼は、マヤ的な伝統の中でその自然観、神観念、空間感覚、時間感覚にもとづく意味づけを基底としていることを解明した。

マヤ・ユカテカの一カトリック村落マニにおける宗教的文化統合は、キリスト教的な要素とマヤ・ユカテカ的な要素の両方を複雑に包含しながら存続変容してきている。

キーワード：カトリック的宗教文化統合、マヤ、奇跡、メン、病気治療

目　次

はじめに ―カトリック的宗教文化統合の一側面―
Ⅲ　メンと病気と伝統医療
　1　マニのメン
　2　マニにおける病気とメン
　　1）悪い風（*kakash ik*）

２）エチソ（*echizo*　邪術）
３　メンと予言
４　メンと女性
おわりに

はじめに ―カトリック的宗教文化統合の一側面―

カトリック村落マニには、「メキシコ低地マヤ地域におけるカトリック的宗教文化統合の実証的研究―マヤ・ユカテカの―カトリック村落マニにおける奇跡を材料として（２）―」(2008)[1]で既に取り出したように、神の懲罰（*castigo*）の結果としての病気という考え方が存在している。誓願（*promesa*：*juramento*）を果たさなかった人や、悪行を働く人への懲罰として、神は人間を病気にする。苦難としての病気の観念は、現象としては人物、家畜家禽、作物、大地の不調不振として現れる。

マニで病因を解明し、病気を治すことができるのは神と聖像とメン（*men*　呪医＝祭司）である。教会の神と聖像、また教会の神とは異なると意識されているその他の神々は病気を投げつける存在であると同時に、病気を治癒させる存在でもある。そしてマニの人々によって奇跡的としてとらえられる事象を最も多く含むのは、神や聖像やメンによる病気治療の領域である。神や聖像やメンによって病気が治癒させられる過程や治癒した結果が、マニでは奇跡的な事象として語られる。聖像による奇跡の治癒力と、聖像の懲罰としての病気をめぐる信仰は、聖像のための祝祭を存続させてきている重要な要素である。聖像をめぐるこうした思考と態度は、マニおよびその周辺村落を越えた広域で展開している。

マニのカトリックの人々の聖像による奇跡への信仰は、マニおよびその周辺村落内だけに止まらず、ティシミン（Tizimin　三賢王）、イサマル（Izamal　ヴィルヘン・マリア）、チュマイエル（Chumayel　キリスト）を中心として、ユカタン半島の諸地域を含めた広域において展開している。病気の治癒だけでなく、作物の豊作、結縁、妊娠、家畜家禽の順調な成長などが、聖像による奇跡として解釈され信じられてきた。

一方、三賢王、ヴィルヘン・マリア、キリストへの誓願への違犯が、病気や不振や不運の動因と説明される。したがって、マニの人々は一旦チュマイエルに行くと言って誓ったならば、とうもろこしを５メカテ（*mecate*　20㎡）余分に作ったり、家禽を売ってでもチュマイエルに出かける。イサマルのヴィルヘンに捧げ物をすると誓ったならば、到達するのに困難な高い遺跡（*k'nic k'akamo*　ヴィルヘンが発見された場所）への道程でも、決して途中で引き返したりはしない。そのような断念は、ヴィルヘンへの嘘であり、早晩早死にか転倒が本人に科罰される。三賢王に誓願を立てるということは、常に‘*tres reyes*’と呼びかけ他の呼称を使用せず、供物（ろうそく、小旗、パニュエロ、ロザリオ、衣服、牛、闘牛用の銛など）も三賢王に均等割りするなかで行われるべきとされる。この誓願の立て方への違犯も当人に妊娠や豊作をもたらさないだけでなく、違犯者を負傷、病気、死へと陥れると信じられている。

このように宗教は文化複合として存在している。宗教は単に教義にあるのではなく、文化の基底にあり、集団に分有され、具体的な生活として存在しているのである。したがって、宗教を理解するためには、宗教を共有する人たちの間で何が分有されているのか、何がどのように分有されているのか、を時間感覚、空間感覚、心的過程、社会構造、政治経済的態度などの視点から具体的に分析し、宗教現象の科学的解明を試みる必要がある。宗教は現実には宗教的文化統合として存在する。この意味で宗教の理解は深さを要求するのである。

本稿では、マニの人々によって奇跡的としてとらえられる事象を多く含むメンによる病気治療を材料領域として、宗教現象を分析する。

「今までに最も奇跡的と受けとめた出来事は何ですか？（*¿Que es la cosa mas milagrosa en su vida?*）」の質問への応答の中に病気治療に関する内容を含む事例はマニで111を数える。これらの111の事例は病因、治療手段の内容に関して、教会の神や聖像による病気治癒に関わるものと、メンによる病気治癒に関わるものとに大別できる。病気治療を奇跡的な事象との関連でとらえるためには、これらの両面における考察が必要であるが、ここではメンによる病気治療を材料として奇跡的事象の分析を行いたい。

Ⅲ　メンと病気と伝統医療

１　マニのメン

写真１　土地のための儀礼（*jetzulum*）を行うマニのメン

写真２　水のための儀礼（*huaji cheem*）を行うマニのメン

マニのメンは伝統医として治療を行うだけでなく、種々の伝統的な儀礼を司る。この二つの機能は一般の人には担えないものである。後者の機能だけを果たす者もいるが、その場合はメンとしての社会的評価は低くなる。

マニのメンは治療手段の修得の動機や過程において、あるいは治療の過程において、エクスタティックな要素が弱い。治療手段の修得について、「夢の中で神から授けられた」と説明するメンも一人いるが、残りは「他のメンから伝授された」形をとる。治療手段の修得の場面で、「人格の根底的変換」、「一時的死」、「自己の分裂・分身」に関する内容が物語られたり、あるいは、それらに関する「夢」が語られ、解釈されたりすることも現在のところない[2]。

メンたちは、農業に従事し、独身ではなく結婚をし、普通の家族生活を営む。住所も村境とか洞窟の近辺等の特別な所ではなく、村の中心付近に居をかまえ、しかも家は道沿いに建ててある。全員がカトリックであり、他のカトリックと同じ服装を身につけ、治療の間でさえ普段の装いと変わらない。村の仲間たちと酒を飲み、村の公園で談笑し、エヒードの会合をはじめとする村の集会にも顔を出す。

メンの現実の生活には、孤立性、神秘性、秘密性等は弱い。しかし、村の人々は、メンを「われわれとは違う」「メンはいろいろなことを知っている」「メンには、われわれが判らないことが判る」「メンは病気が治せる」などと言って普通の人と違った見方をする。事実、「メンなしに伝統的な農耕儀礼（神父によればマヤの儀礼であり、カトリックではない）は行えない」。家屋敷、家禽、井戸、田畑、山野など、農耕を生業とするマニで重要な環境のために、また、それらの環境での農耕を成功させるのに不可欠な雨のために、メンは村人に乞われて伝統的な儀礼を行っていく。それらの儀礼は、「他のひとには訳がわからない祈り」と「何か神と言葉を交わす力」を必要とするものだけに、「他の人にはできない」ものである。

メンへの社会的評価が強く表れるもう一つの領域は、病気治療である。この資質は、メンによると、「神が与えたもの」「神が選んだもの」「生来のもの」と解釈され、誰にでも無条件に譲渡されるようなものではない。この解釈がメンによる病気治療を奇跡的な事柄として語る土壌となっている。

ここでメンによる病気治療に関する具体的事例を材料にして、どのような場面でどのような要素がメンの病気治療を奇跡的と解釈させているかを取り出していく。その作業をとおしてカトリック村落マニにおける宗教の在り方の一局面を抽出したい。

具体的には、メンは病因をどのようにとらえているか、病因に対してどのように対抗手段をとるか、メンの治療行為のどの部分がマニの人々によって強調して語られ評価されるか、などが問題となる。

２　マニにおける病気とメン

１）悪い風（*kakash ik*）

メンの治療は祈りによる病因の祓い出しを重要な部分として含むが、最初に行われる治療行為

は病因の割り出しである。

病因の割り出しは、いわゆる問診によって症状についての情報を蒐集した後で、ティッチカック（*tich'k'aak*）と称されるガラス玉（*sastun*）による占い、ローソクの炎を洞察することによる占いやトウモロコシの実を使っての占いを手段とするのが通例である。メンは相談者の生まれた場所、誕生日、名前を聞いた後で病因を占う。ガラス玉を使用する場合は、「そこに映し出される模様や陰影や透明不透明などを材料にして病因を割り出す」のだという。トウモロコシを使用する場合は、「その実を３粒相談者に投げさせて、散布の状態を判断の材料にする」。この場面で「メンは病気を治せるかどうかを必ず言う」が、この姿勢を高く評価する人もいる（Ｄ－２：４：８：17）。これら二つの方法は病因の発見だけでなく、運勢の占いや悩み事の相談に対する回答を引き出す際にも用いられる。

病因が発見されると、ついで祈りによる病因の祓い出しが行われる。メンが割り出す病因の中で頻出する事例は風である。

マニの人々はメンを「悪い風に（*kakash ik*）に対抗できる力を持っている」とか、「神（*yuntzil*）と言葉を交わす力を持っている」と評価する。「悪い風」は、マニにおいては、人物や動物の病因となる。例えば、メンの行う伝統儀礼の一つに、土地のための儀礼（*jetzulum*）があるが、人々がこの儀礼をメンに依頼するのは、自分たちの飼っている家畜や家禽の育ちが悪かったり、病気にかかったり、死んだりする場合である。「水のための儀礼（*huaji cheem*）」や「ミルパのための儀礼（*huaji kol*）」も、作物の発育が思わしくなかったり、凶作が続く時に行われ、このような場合に人々は、「土地やミルパが病気（*kojan*）である」という。

それらの不幸、病気、不運、不振は、人々が神々へ正しく供物と祈りを捧げないから、神々が怒り、「悪い風」を送ってそれらの現象を引き起こしているのだと説明される。したがって、メンの行う儀礼は、人々の依頼による神々の宥和であったり、贖罪であったりする[3]。メンが病因として言及する主な因子は下記のようである。①*chuca'an men ik*（風につかまえられる）　②*chuc men yikal ch'en*（井戸の風につかまえられる）③*chuc men yikal ja'*（雨の風につかまえられる）④*chuc men yikal col*（トウモロコシ畑の風につかまえられる）　⑤*chuc men yikal sahacab*（洞窟の風につかまえられる）　⑥*chuc men yikal actun*（水の出る洞窟の風につかまえられる）　⑦*chuc men yumil ka'ax*（山の神につかまえられる）⑧*chuc men yikal bej*（道の風につかまえられる）⑨*chuc men yuntzil*（ユンツィル（神）につかまえられる）⑩*ya'ax ich che'*（果樹の初物を神に捧げない）⑪*ch'a chac*（雨の神に食べ物を捧げない）　⑫*man kakas chi'ich yokol*（悪い鳥が上を横切る）

病因としての「風（*ik*）」の存在とその影響は極めて強く、つぎに掲げる治療儀礼における祈りには、「風」に祈りや供物で対応しようとするメンの姿がよく表れている[4]。

（１）メンの祈り

写真３　供物をそなえて祈るマニのメン

写真４　供物をそなえて祈るマニのメン

祈り－１

神よ（*in yum*）東西南北の風、（*yika le lakino chikino nojolo yetele xamano*）がこの祭壇に吹き来たりて、あなたの子どもたちのための収穫をあなたの掌に残しますように。

神よ、私は此処にいて全ての風を受け止め、新しいトウモロコシを私たちに与えてくださいますよう、いやそれに先立って新しい雨を私たちに与えてくださいますよう乞い願います。

神よ、此処にあなたに捧げるべくあなたの子どもたちが持ってまいりました供物（*jana*）を整えましょう。

神よ、東西南北の区画に全ての風が立ち現れて私たちの供物を分かち合いますように。

神よ、この初穂儀礼をいたします、とのあなたの子供たちの約束（*promesa*）は今や果たされました。それ故あなたの子供たち皆に恵みを与えくださいますよう。

神よ、何人もあなたに向かって語るべきでないこの罪人の大地（*lumi k'bano'ob*）に、あなたをお喚びすることをお許しください。そのようなことをする私をお許しください。

神よ、あなたにこの聖なる初穂を引き渡しましょう、その引き渡しのために私は西の風と南の風を、さらに東と南にいらっしゃる全ての風をお喚び起こしいたします。

神よ、捧げられた供物をお召し上がりください、この捧げ物は西と北の風のためのもの、新しい捧げ物をご覧じください。

何人も触れることのなかった食べ物を糧にしていただきたいので、また此処に私たちが用意したバルチェ（*balche*）を飲んでいただきたいので、全ての神々をお喚び起こしいたします。

全ての風の手中に、犠牲の鳥と蒸しパンとバルチェ並びに卓上の供物全てをお捧げいたします。

全ての風の神々に卓上のものを残りなくお引き渡しして、私たちのトウモロコシ畑をご加護くださるよう乞い願い上げます。

私は此処にいまして全ての風の神々をお迎えし、ご案内申し上げます。恵み深き土地の主（*ah cacab*）をお喚び起こしいたします。あれこれをお訪ねまわられる全ての風（*le iko'cu che'nebobo*）をお喚び起こしいたします。存在していらっしゃいます全ての風（*tu lac le iko yanobo*）がご参集されるようお喚び起こしいたします。ご参集されるこの卓上に食べ物をトルタをバルチェを、これより以前には何人にも捧げられたためしのない食べ物をお捧げいたします。

私はトウモロコシ畑を守護される風（*le iko cu canan colobo*）をお喚び起こしいたします。畑の境界を守護される風（*le cu canan xukobo*）をお喚び起こしいたします。竜巻の風（*le mozonikobo'*）をお喚び起こしいたします。全ての風にこの食べ物を分かちいただくために、全ての風をお喚び起こしいたします。風の怒りをお鎮めいただくために、これらの食べ物を私たちがお捧げするのをご覧じいただき、ご満足を賜るために、

これらの初穂を風の中でも下位の風（*meni'le ikobo*）に、洞窟の風（*yika le pambilumo*）に、新しい火に、石の風（*yika le tunchobo*）にお捧げいたします。それらの風はトウモロコシ畑をお創りくださって、それを守護してくださっているのですから。

これらの初穂は、初めてお訪ねくださる風（*le iko yax u taalobo*）のために、石の背後であれこれをお訪ねまわられる風（*le ik cuch'ene pache tunchobo*）のために、洞窟から出て歩き回られる風（*iki le cu joloo ti le actunobo*）のためにお捧げいたします。火の神（*le kako*）、雨の神（*le chaco*）をもまたお喚び起こしいたします。風の神々（*le ikobo*）もまたお喚び起こしいたします。そのような神々の手中にこの食べ物をお引き渡しいたします。

風の神々に乞い願い上げます。雲の神々（*le muyalobo*）をご案内くださり、あなたの子供たちのトウモロコシ畑にお恵みを賜わりますよう、新しいトウモロコシの茎を雲が元気づけ賜わりますよう、私たちが食べ物に恵まれるよう、あなたの子どもたちに幸を賜わりますよう乞い願い上げます。

今や私がその数を数え上げてみましょう、やぁ、そろうたそろうた四方の区画の神々と風がこの卓上にお揃いになりました。恵み深き神々に乞い願い上げます、この聖なる初穂をお受け取りください。この卓上に捧げられた全ての供物をあなたの手中にお引き渡しいたします。

この祈りの中では、①東西南北の風（*yika le lakino chikino nojolo yetele xamano*）、②あれこれをお訪ねまわられる全ての風（*le iko'cu che'nebobo*）、③存在していらっしゃいます全ての風（*tu lac le iko yanobo*）、④トウモロコシ畑を守護される風（*le iko cu canan colobo*）、⑤石の背後であれこれをお訪ねまわられる風（*le ik cuch'ene pache tunchobo*）、⑥洞窟から出て歩き回られる風（*iki le cu joloo ti le actunobo*）、⑦風の神々（*le ikobo*）、⑧畑の境界を守護される風（*le cu canan*

xukobo)、⑨竜巻の風(*le mozonikobo'*)、⑩風の中でも下位の風(*meni'le ikobo*)、⑪洞窟の風(*yika le pambilumo*)、⑫石の風（*yika le tunchobo*)、の形で風が形容されている。それらの風がメンによって迎えられ、初穂とマヤの伝統的供物が捧げられ、送られる。

風の神々は、東西南北、洞窟、石の背後、畑の境界、などあちこちに存在し、風の怒りを鎮め、雨の神（*le chaco*）や雲の神々（*le muyalobo*）を案内し雨を降らせ、トウモロコシ畑を実らせ、マニの人々に食物と子孫と安寧をもたらす。

風はこのように恵み深い側面をもっている。迎え、「これまで何人も食べたことのない食べ物」でもてなし、お送りすれば人間に恩恵をもたらす。しかし、風はそのような人間の側からの働きかけが行われないと、「空腹になり」、「怒り」、人間を土地を家禽類を病気にする。

一方、生来悪い風が存在する。この風は人間に対し悪いことばかりをしかけてくる迷惑な存在である。この風は神の力を頼りに取り除かなければならない。それを行うことができるのがメンである。

写真５　病気治療をするマニのメン

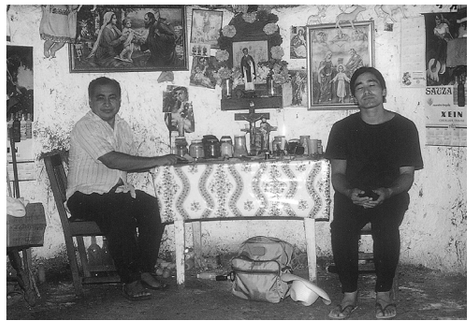
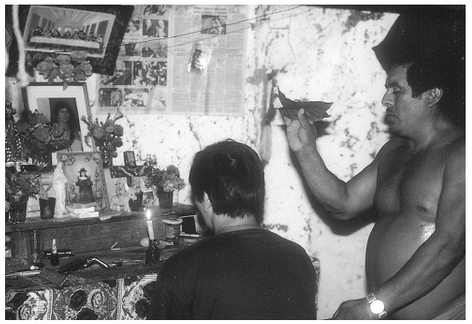


写真６　病気治療をするマニのメン



祈り－２

神よ、大なる悪い風（*nuuxi ka'kax iko'obo*）から、この子供をお治しください。
悪い霊（*ka'kax pixano'ob*）から、この子供をお治しください。
この子供がこの世で生き長らえることができますように、
この罪深い世の中（*luumil ke'ebanoo'*）で、正しい仕方で、正しい世を、父なる神の正義の中で生きていくことができますように、
火曜と金曜に、苦しみの日である（*yayaah ki'inoobo*）火曜と金曜に、神よあなたに乞い願い上げます。
この子供をお治しください、この子供の身体を大なる悪い風（*yaya'a iko'obo*）からお治しください。

神よ、あなたの玉座で、神よ、あなたの栄光が、この罪深い子供の身体をお治しくださいますよう、
この「某」という名前の子供を、痛みを与える風からお治しください。
この「某」という名前の子供の痛みのあるところから、子供をお治しください。
この痛みを牛耳っているもののあるところから、子供をお治しください。
この子供がそのような痛みから逃れておれるよう、お治しください。

メンの治療行為において、祈りによる祓い出しは重要な部分を占めている。この治療を「交霊によって治療する（*le trabaje espiritualmente*)」とメンは表現する。祈りは、植物（ルダ *ruda*、シップチェ *sipche'*、シナンチェ *sinanche'*）を患者の頭上に直接置いて、メンが唱え、祈りの最終段階ではそれらの植物で患者の身体全体を撫でる。特に、子供を治療する場合に、上方に両手で抱え上げて息をフーッと吹きかけたりもする（Ｄ－２)。メンは、「祈りはマッサージを与えている」と説明する。両手で音を立てながら祈るのは、そのためであるという。

メンの祈りは、既述の風の神々（*le ikobo*)、火の神（*le kako*)、雨の神（*le chaco*)、雲の神々（*le muyalobo*）などのように、マヤ・ユカテカ的な神々だけでなく、聖人と聖母の喚起と招へいを含むのが特徴である。下記の祈りにも、①大地の全ての所有主（*tu lac luu yumi lee luma'*)、②東西南北の所有主（*tile' lak'in chik'n nojol yeten xaman*)、③全てのチャック（*tu lac le chacobo*)、④バラムの神（*balamobo*)、⑤雨の神々の中では若い神々（*xan u palali yumobi chac*)、⑥緑の雲（*le yax muyalobo*)、⑦水の運び主（*le cuch jaobo*)、⑧太陽の神（*ah kin chi*)、⑨コバの太陽神（*aj kin ti Coba*)、⑩ツィプの太陽神（*kin colante Dzib*)、⑪チラム・バラムの神（*chilam balam*)、⑫ククルカンの神（*kukulcan*)、⑬太陽の神（*yum kin*)、⑭聖なるチツェンイツァの主（*yumi san Chi Chen Itza*)、⑮聖なるウシュマルの主（*san Uxmal*)、⑯イツマルの風（*yikal Itzmal*)、⑰洞窟の風（*yika le chultumobo*)、⑱境界の風（*iki le xukobo*)、⑲竜巻の風（*yumi le mozonb*）などのマヤ的な神々がメンによって喚び起こされ、迎えられ、マヤの伝統的な食物と飲物からなる初穂でもてなされ、神々が供物を享受すると退座が乞い願われている。

しかしその一方で、①全ての天使と大天使（*le angelesobo yete arcangelesobo*)、②聖バルトローマエ（*San Bartolome*)、③聖ペドロ（*San Pedro*)、④使徒たち（*le santos apostolobo*)、⑤父なる神（*yun tata*)、神の子（*yal*)、聖霊（*pixan santo*）であるヘスス・クリスト、⑥ファン・バウティスタ(*Juan Bautista*)、⑦サン・ロマン(*San Roman*)、⑧サン・アントニオ(*San Antonio*)、⑨三賢王（*oxtu Reyes*)、⑩サン・エステバン（*San Esteban*)、⑪サン・ベルナルディノ（*San Bernardino*)、⑫７日の７聖霊（*juucp'eli pixano ti lu juucp'eli kino*)、⑬聖母マリア（*cole bil Maria*）などの天使、大天使、使徒、聖霊、ヘスス・クリスト、聖母マリアなどのキリスト教的な神、聖人、聖母が喚び起こされて迎えられ、初穂を供えられ、最終的にはどこかへの退座が懇請されている。

写真７　神に祈るマニのメン

写真８　神に祈るマニのメン

祈り－３

神よ（*in yum*）、あなたの御名のもとに、大地の全ての所有主（*tu lac luu yumi lee luma'*）を、東西南北の所有主（*tile' lak'in chik'n nojol yeten xaman*）をお喚び起こしいたします。

神よ、私たちにあらゆる物をお与えくださっている神よ、ただ今、全てのチャック（*tu lac le chacobo*）をお喚び起こしいたします。

神よ、あなたは私たちにトウモロコシをお与え下さる力を持ち合わせていらっしいます。

神よ、あなたの掌上に私たちの収穫をお載せください。

神よ、東と南を恵み深くあらしめてください。

神よ、此処に在りますあなたの子供たちの収穫のために新しい雨をお恵みください。

神よ、あなたが私たちに雨をお与えくださるよう、あなたの掌とバラムの神（*balamobo*）の掌の上に私たちの全身を委ねたく存じます。

雨の神々の中では若い神々（*xan u palali yumobi chac*）を、さらに全ての天使と大天使（*le angelesobo yete arcangelesobo*）をお喚び起こしいたします。神々がご来臨される道も今や整いました。

緑の雲（*le yax muyalobo*）にも、水の運び主（*le cuch jaobo*）にも、この初穂をお捧げいたします。

この初穂を太陽の神（*ah kin chi*）にお捧げいたします。天空の三層（*oxp'el u yala le cano*）にはそれらの神々がいらっしゃって、ご高名でもいらっしゃいますので、食べ物と飲物からなるこの初穂にご満足をしていただきますよう。

コバの太陽神（*aj kin ti Coba*）もツィプの太陽神（*kin colante Dzib*）も、この初穂にお招きいたします。

聖バルトローマエ（*San Bartolome*）も聖ペドロ（*San Pedro*）もこの初穂にお招きいたします。使徒たち（*le santos apostolobo*）が天空の門をお見つけになって、そこからヘスス・

クリストが私たちがなすことをお見届けくださるために、

この初穂を父なる神（*yun tata*）、神の子（*yal*）、聖霊（*pixan santo*）であるヘスス・クリストにお捧げいたします。我々がこの初穂をお捧げするために一体となり、善き心がけによりそれを行っていることを、神々がお見届けくださいますよう乞い願い上げます。

聖なる使徒たちをお喚び起こしいたします。ファン・バウティスタ（*Juan Bautista*）、サン・ロマン（*San Roman*）、サン・アントニオ（*San Antonio*）、三賢王（*oxtu Reyes*）、サン・エステバン（*San Esteban*）、サン・ベルナルディノ（*San Bernardino*）たちとともにこの初穂を分かち合いくださいますよう、この食べ物をそのような方々の手中にお引き渡しいたします。

聖母マリア（*cole bil Maria*）にこの食べ物をお捧げいたします。子供をお授けくださるだけでなく、私たちをもお助けくださいますありとあらゆる聖母マリアに、この食べ物をお捧げいたします。

チラム・バラムの神（*chilam balam*）、太陽の神（*aj kin*）、ククルカンの神（*kukulcan*）、太陽の神（*yum kin*）をお喚び起こすことのできる力を私にお与えください。７日の７聖霊（*juucp'eli pixano ti lu juucp'eli kino*）をお喚び起こしいたします。月曜から土曜までの神々をお喚び起こしいたします。これらの神々は７つの聖霊にお関わりくださいますので。

聖なるチツェンイツァの主（*yumi san Chi Chen Itza*）をお喚び起こしいたします。聖なるウシュマルの主（*san Uxmal*）をお喚び起こしいたします。イツマルの風（*yikal Itzmal*）をお喚び起こしいたします。洞窟の風（*yika le chultumobo*）と私たちが一度も訪れたためしのない洞窟の全ての風をお喚び起こしいたします。

今や、全ての神々がこの卓上に、罪人たちの大地（*lumi kebanoba*）にご参集くださいましたので、私たちが喜びをもってお捧げするものを余すところなくお受け取りください。トウモロコシを鳥をバルチェをお受け取りください。

東の風すなわち東の神は、私たちに祝福と最良の収穫をお与えくださいます。

今や此処の食べ物をご享受くださったので、東西南北の神々よ、ご退座くださいますよう。

此処の食べ物をご享受くださった天使、大天使、聖霊にもご退座くださいますよう乞い願い上げます。

ご来臨いただいた境界の風（*iki le xukobo*）、竜巻の風（*yumi le mozonb*）その他すべての風にもご退座を乞い願い上げます。

ご来臨いただいた全ての神々にご退座を乞い願い上げます。この卓上にお留まりにならないよう乞い願い上げます。全ての神々はご満悦していただいたのですから、全ての神々は恩恵をお携えになりお出でくださったのですから、私は私たちが皆善く生きるようお恵み賜わることができるよう乞い願ったのですから、私たちの捧げ物も願いごとも果たされたのですから。

特に子供の邪眼の場合は、サン・マルティン・カバイェーロ（*San Martin Caballero*）、ヘルトゥルーディス（*Gertrudis*）、マルタ（*Martha*）、マテオ（*Mateo*）、ルカ（*Lucas*）、ニーニョ・デ・アトーチャ（*El Nino de Atocha*）、サン・フアン・バウティスタ（*San Juan Bautista*）などが病因の祓い出しに懇請される[5]。

メンによると、熱は空から落ちてくる火や水によって引き起こされると考えられている。熱を引き起こす火や水が空から落ちてくるのは、神が人間の多くの罪（*pecados*）によって気分を害された（*se molesta*）ために、人間を焼こうとしているのである。そこで聖母は火が水の中に落ちるようにして人間を助ける。従って聖母を懇請するのだという。

成人が「山林の神の悪い風」によって病気になった場合は、マヤの神々の力を懇請する。空間の４隅を守護するバラムイック（*balam ik*）と、４匹のアルーシュ（*alux*）の名前を呼び求める[6]。

悪い風を病因とする場合の症状は、高熱、頭痛、腹痛、下痢、緑の排便（*ya'axja'*）が特徴である。祈りを中心とする病因の祓い出しにつづいてメンはつぎのような治療を行う。

治療は患者を麻痺させるために、（治療）台の先端を３度叩く（*golpeando*）ことで始まる。この行為は、患者の身体は一人の聖者の霊（*espiritu de un Santo*）で独占されているとの解釈を前提としている。例えば、聖マルティンカバイェーロが、患者の身体の中の一部、すなわち聖マルティンの持ち馬が早駈けする場所を独占していると解釈された場合には、患者の座っている椅子の（先端を３度叩くことで）出す音は、聖マルティンの持ち馬の早駈けのように聞こえるという。そこを叩きながら、メンは患者に向かって言う「さあ、急ぎなさい、さあ、病気よ、出て行きなさい。さあ、全ての病気よ、出て行きなさい。さあ、急ぎなさい」。このように「メンが治療をしている間、死者となったメンが彼と一緒にいてその患者の治療を助ける」、とメンはいう。死者となったメンへの援助を乞うときには、メンは声色を変えて両者の役を担うという（Ｄ－２）。治療を行いながら、メンは助手に患者の病気の治療に不可欠の植物の名称を伝達する。助手はそれらの植物を後で山野に探しに行かなければならない。この場面でメンが言及する植物は、死者となったメンが彼に伝えたものである。メンはそれらの植物で薬を処方し、下記のような病気に対処する[7]。

悪い風や破傷風が引き起こす熱はつぎのように処方された薬で治す。みかん、レモン、サラムヨ、プラム、トゥハチェ（*tuja che*）、ルーンチェ（*luun che*）、キスユック（*kis yuc*）、シップチェ（*sip che*）、ナバンチェ（*naban che*）、カナン（*kanan*）、ツルムトック（*tzurum took*）、ハビン（*jabin*）、ツィウチェ（*tziu che*）、ピチチェ（*pichi che*）の葉を千切りにして煮て、沸騰したところを水で冷やして作った薬を、患者の身体に浴びせる。患者の身体を衣服で十分に包み発汗させた後で、また薬を身体に浴びせる。この行為を何度もくり返す。

メンによる解熱の処方箋には、つぎのようなものもある。みかん、レモン、樫、サラムヨ、サンザシ、ピチ（*pichi*）、ピチチェ（*pichi che*）、トゥーンチェ（*toon che*）、ハビン（*jabin*）、トゥハチェ（*tuja che*）などの葉を煮て、沸騰した時点で水で冷やして作った薬を、身体に浴びる。

こうした祈りと薬草を中心とするメンの治療は、火曜と金曜ごとに９回行われなければならない。メンの祈りでは、両曜日は「苦しみの多い日」とされている。これらの曜日には、家庭祭壇にローソクを点し花を捧げて、治療の効果の増大を期待するという（Ｄ－20）。メンの治療は失敗したり、多大な時間がかかったりするのも事実である。Ｄ－22は、５週間がかりで治療を受けているが、今だに根治していない。Ｄ－33は、治療が終わらないうちに、別の病気に罹ってしまっている。

９回の治療を終了した時点で、ケーシュ（*k'eex*）を行う。マヤ語ケーシュは、マニ村においては、スペイン語で *cambio*（変換）と翻訳される。ケーシュの行為は、料理された鶏あるいは生きた鶏を神々とメンに捧げることである。使用される鶏の選択には一定の規則がある。男の幼児の場合は、黒色の若い雌鶏、女の幼児の場合は、黒色の若い雄鶏のように、性別による区別が存在する。患者の性と鶏の性を交叉させなければならない[8]。さらに、成長段階によって、子供と成人の区別があり、子供の場合は、焼いた黒色の若い雄／雌鶏を使用する。成人の場合は、焼いた大きな雄／雌鶏を捧げるだけでなく、生きた大きな雄／雌鶏を捧げなければならない。この生きた鶏は、患者の頭に直接置かれ、その状態を保ちながら、メンによる祈りが唱えられる。人々は、「生きた鶏はそこで死ぬ」のだ、と説明する。焼いて料理された鶏と、象徴的な死を経た鶏は、「風の神々と死者となっているメンへの捧げ物である。なぜなら（今治療している）メンは、（死者となって今ここにはいない）９人の男メンと９人の女メンと一緒に病気を治しているのだから。」である。これらの鶏は、メンと依頼人との間で折半される（Ｄ－４）。

写真９　伝統的な方法で神への供物を作るマニの人々

写真10　伝統的な方法で神への供物を作るマニの人々

２）エチソ（*echizo*　邪術）

病因との深い関連の中でメンが重視するのがエチソである。マニの人々も、エチソによってメンの病気治療を特色づける傾向が強い。メンに関わる病気治療38事例の中で、エチソは17事例を占めている。メンはエチソを解く存在であると同時に、エチソをかける存在でもある。

エチソは呪詛（*maldición*）とは異なる。呪詛は、何か不快な状況に置かれた人物が、自分をそ

のような状態に陥れた人に対し発話行為をして、発話内容に相応する報復をすることである。したがって発話によってある影響、例えば相手が負傷するとか相手が人生に失敗するとかの影響を及ぼしたとしても、その行為へのマニの人々の非難はない。とはいえ、エチソをメンに頼んでかける人物は、何らかの理由で自分が不快な状況にあるのは通例であるとしても、その動機や行為が、マニにおいて社会的に正当性を得ることは困難である。後にその事例を示すように、エチソが恋愛の成立を動機とする場合は、その行為への社会的非難は他の場合よりは弱まるが、依然としてエチソには消極的な評価しか伴わない。

ここで、メンが関わるエチソの具体的事例を取り上げ、考察の材料としていく。

（１）症状

エチソの事例１　（Ｄ－16）　Magdalena Campos Tzec　主婦　33歳

メンの持っている力を信じています。彼らが、ある事を別の事に変えることができる、のを目の当たりにしたことがあるからです。私の長女は生まれた時、皮膚がなく、触ると骨が壊れるために死にました。その際メンの所に行きました。これは悪業（*una maldad*）だ、その責任者は私で、ある女に対して犯した過ちのためである、と言われました。私はいつも経済的理由から裁縫を現金化しておりましたが、結婚した時、全てを手渡しておりませんでした。私は義理の両親が私の借金を支払うものと信じておりましたが、そうではなく、その半分を支払いました。残りの半分の借金が、長女の死の原因だったのです。これで、全てが終わったと考えておりました。

しかし、１年経って次女を授かりましたが、この娘も４年経つと病気になり、医者に連れて行き始めました。確かに良くなりましたが、すぐにまた病気になりました。熱を出し、嘔吐し、下痢をしました。次第に衰弱してきて、そのうち時が経っても良くならないのを見て、何人かのメンの所に行き始めましたが、どのメンも治せませんでした。ユカタンのママ（Mama　地名）に立派なメンがいると聞きましたので行きましたところ、次女はエチソにやられている、原因は私が未支払いの借金である、私は誰がエチソをしているかを完全に知っているはずだ、と言いました。確かに私はそれが誰かを知っていました。私の叔母が私の娘に悪業をする理由を持っていました。その悪業は私に対するものに他ならなかったのですが、私の娘がそれを負ってしまった。ママのメンの言うところによれば、私がそれ（＝エチソの材料である粉。後述）を飛び越える（*brinque*）ように私の行く手に置いたのだが、それを娘が最初に横切ってしまった。メンの行った試みにもかかわらず、メンたちは娘を治すことはできませんでした。私はメンだけでなく、医者のところにも同時に連れて行くようになりました。義父がメンを信じておらず、医者だけを信じていたからです。そして、医療費を払うのも義父だったからです。

ところで、私に起こったことで、一番驚くべきことは、マニのメンのところに行った時のことでした。その当時いいメンと思われていたのはこのメンだけでしたから、彼の所に娘を連れて行き

ましたところ、私の娘は悪業による病気である、自分はそれを治せる、と言って、私に何かわからない木の小枝と殻の入った紙袋を与えました。そして、家に帰ったら、すぐに娘が飲めるように用意するように言いました。家に着いて紙袋を開けようとすると、娘が発作を起こしましたので、娘をすぐに病院の医者に連れて行きました。病院から家に戻った時、お湯を沸かし、メンのくれた薬を用意しようとして紙袋を開けると、中は全て毛の生えた黒い蛆虫だらけで、虫たちは呻き声を上げていました。これを見た時、私は義理の両親と義理の姉妹たちにそれを示しました。この時以来、メンの力を信じるようになりましたが、二度とメンの所に行くことはしませんでした。恐ろしくなったのです。私たちが発見したところから、私の叔母によって金を支払われ、私の娘に悪業を働いたのはマニのメンに他ならないと結論しました。かわいそうに、私の娘は６歳になったところで死にました。２年間病気を患った後で、身体は萎縮し、死んだ時は骨と皮だけに痩せこけて、肉はありませんでした。

ここでは二人の子供の異常な病死（「皮膚がなく、触ると骨が壊れるために死ぬ」「生後４年から熱、嘔吐、下痢をくり返すなかで２年後痩せこけて死ぬ」）がエチソの症状として語られている。エチソをかけられた人物は、食事を取らずしゃべらない（Ｄ－21：Ｄ－27)、４日にわたる腹痛（Ｄ－22)、嘔吐（Ｄ－23)、偏頭痛（Ｄ－33)、ズボンが何度もずり落ちる（Ｄ－26)、気が狂い他人に理由なく石を投げたり、他人を恐がるようになる（Ｄ－28)、糞まみれ血まみれになり、食事をとろうとすると碗に虫が入ってきて食べられない（Ｄ－30)、突然叫び声をあげ蹲り、身体の各所に激痛が走り立てない（Ｄ－38)、腹が脹らむ（Ｄ－４）のように、病的な状態や異常な精神状態に陥ったり、奇妙な体験をしたりする。

上述の状態の発見はメンだけによってなされるのだが、事例１に「(メンは私に）私は誰がエチソをしているかを完全に知っているはずだ、と言いました。確かに私はそれが誰かを知っていました。私の叔母が私の娘に悪業をする理由を持っていました。」とあるように、また、次に示す事例から理解できるように、一般の人々によって察知される場合もある。

「…兄をエチソで失う。母が何度もそのことを注意するが、本人の無関心で兄は命を落とした。
…死ぬ前にメンのところに連れて行ったが、このメンには治療はできないと言われた。医者にも診てもらったが、医者も治療できなかった。兄はエチソで死んだのだから。…」（Ｄ－30）

マニの人々は、エチソによってそのような状態を引き起こせるのは確かにメンであることを疑わない。事例１では、「…私たちが発見したところから、私の叔母によって金を支払われ、私の娘に悪業を働いたのはマニのメンに他ならないと結論しました。…」と語られている。

「…そこで一人のメンに相談したが、ドンフベンティーノ（マニのメン）のところには行かなかった。母にエチソをかけているのは彼である、と判明するのを恐れたからである。また、マニにいる他のメンにも診てもらわなかった。そのメンの中の一人が、母にエチソをかけるよう金を支払われているのではないかということが恐かったからである。…」（Ｄ－22）「…皆でお金を集めて、ママ（Mama　地名）のメンに診てもらう。なぜなら、本人の家族は、彼らにエチソをかけているのはマニのメンだろう、と推測していたからである。彼らの誰一人として、それまでメンに診てもらったことがなかったからである。…」（Ｄ－23）「…この日の午後、母が不幸な目に会ったのです。無論、神の罰ではなく、私の家族に嫉妬した人が、メンに頼んで母にエチソをかけたのです。…」（Ｄ－38）

「エチソをかけることができるのは、メンだけである」という人々の確信は、次の事例のような出来事が語りつがれる中で、メンに対する一種の恐怖感を生み出している。事例１に「…メンの持っている力を信じています。彼らが、ある事を別の事に変えることができる、のを目の当たりにしたことがあるからです。…」

「…メンの力を信じるようになりましたが、二度とメンの所に行くことはしませんでした。恐ろしくなったのです。…」と記述されているのも、この側面と関係がある。

「…一人の男が、金がないことを理由にしながら、メンに治療代を払おうとしなかった。するとメンの母（女メン）はその男に、ズボンの中に何か持っているだろうと尋ねました。男が、それはハンカチだと答えると、メンの母はそのハンカチを出すように言いました。男がハンカチを取り出すと、それは一匹の蛇で、男の腕に巻き付きました。その男がびっくりすると同時に、蛇はズボンの中に入っていきました。男はそれを見ると、ズボンを脱いで投げ捨てました。そしてメンの母に元どおりにしてくれるように懇願し始めました。支払いを誓ったので、メンの母がズボンを元にもどすと、蛇はお金に変わっていました。その男が支払いをすると、メンの母は彼女をからかわないようにと注意をしました。…」（Ｄ－１）

「…女メンは豚となって、一人の男にエチソをかけていた。男は、いつも行く手を豚が遮るので、ある時家に帰ると、猟銃をもってその豚の跡をつけた。その豚は家に帰り着くと、前転９回後転９回を行って、人間の姿に変わった。男はその豚は自分の治療をしていた女メンであることを知った。彼は猟銃で女メンを撃った。銃弾は女メンの心臓をはずれ肩口に当たった。そのために女メンは死んだ。…」（Ｄ－１）

メンだけがエチソをかけるのは事実であるが、メン自身も他のメンからエチソをかけられ、エチソによって同様の影響を受けると信じられている。「マニで最も著名であったメン（フベンティーノ・ペレス・コントレーラス）は、メキシコシティーに一人の女性の治療に出かけたが、彼よりも優れたメンからエチソをかけられて死んだ。フベンティーノがエチソで死んだことは、彼の足の親指から２匹の蛆虫が取り出されたから確実である」（Ｄ－１）

（２）契機

事例１では、債務不履行に対してエチソがかけられているように、誰かがメンにエチソを依頼してエチソは始動する。エチソを依頼するときの動機は、それをかけられた人物をメンが診断し解釈する内容を材料にして、いくつかの種類に分けることができる。

①嫉妬

「…母親がエチソにかけられて死ぬ。エチソの動機は純粋に嫉妬である、とメンに言われた。母親は豚、鶏、七面鳥を養っていたが、それが成功するので、女性の隣人が母にエチソをかけた。…」（Ｄ－22）

「…今から話すことは、私自身に起こったことではなく、私の母に起こったことです。２月の金曜日の午後に起こりました。母はフリホール（豆）を洗っていました。この時期はフリホール、トウモロコシ、唐辛子、ヒラマメなど沢山の収穫がありました。私たちは、家に竈や牛のような贅沢品を買おうと考えていました。しかし、この日の午後、母が不幸な目に会ったのです。無論、神の罰ではなく、私の家族に嫉妬した人が、メンに頼んで母にエチソをかけたのです。…」（Ｄ－38）

②遺恨

「…母とうまくいっていなかった義姉妹から食べ物をもらう。姉たちはエチソの可能性があることを懸念して、この食べ物を食べようとしなかったが、別の義姉妹はそれを食べた。それから12時間後、本人が嘔吐し始める。下痢も始まったので、皆でお金を集めてママ（Mama　地名）のメンに診てもらう。…」（Ｄ－23）

「…娘が若くして何人もの恋人を持つようになったが、その内の一人が娘を妊娠させてしまった。村の裁判で賠償を要求したが、彼の家族は娘を家族の一員とはみなしていなかったので、娘にエチソをかけた。…」（Ｄ－27）

「…夫が若いときから悪事を重ねてきていたのを知らずに結婚した。病気になったので、医者に行ったが回復しない。…本人も寝たきりで、家族はその心臓の鼓動で生きていることを確かめ

るほどの重体に陥った。義理の兄弟がこれを見かねて、マニの有名なメンに診てもらうよう進言した。そこでエチソがかけられていることが判明する。…」（Ｄ－35）

③男女関係のもつれ

「…若い頃から女好きであったが、イトコの一人を好きになった。その頃つき合っていた女の一人が、それを知ってエチソの薬をくれたのだった。エチソの薬とは知らずに、それをチョコレートの中に入れて飲もうとしたが、異臭を感じ、吐き出し難を逃れた。その女は、私へのエチソの効果がなかったことを知ると、今度は別のエチソ、すなわち小山羊（*chivo*）の形をした人間動物（*vay*）で行く手をさえぎったり、脅かすようになった。両親には何も話さなかった。食事をとらなくなったので、両親は心配して何があったのかと尋ねるようになったが、何もしゃべらなかった。しかし、母親が心配してメンのところに出かけて相談をしたら、エチソをかけられていると診断された。…」（Ｄ－21）

「…女遊びをして、妻の姉妹と深い関係になった。関係に飽きて彼女と別れようとしたが、彼女はそれを許さなかった。ある日、彼女の家に朝食に招待されて一緒に食べた後家に帰ると、自分が自分でないような気持ちになって家にいたい気持ちがなくなり、彼女の家に帰りたい衝動に駆られた。彼女に会いに行くと、自分を取り戻して気分がよくなるのであった。金も彼女につぎ込み、自分の妻や子供たちには一銭もやらなかった。やがて経緯を母親と妻に打ち明けると、二人は本人をママ（Mama　地名）のメンのところに連れていった。メンは、愛人の家でとった朝食が悪の元凶であること、愛人がエチソをかけて本人を妻と別れさせたがっていることを告げた。…」（Ｄ－24）

「…奇妙な体験をして元気がなくなったので、メンに相談に行ったところ、エチソをかけられていると診断された。しかもエチソをかけているのは、私の家に新しく入ってきた人物であり、その人物は私が村の広場に出かけて他の女に恋をしないようにとエチソをかけていると告げられる。メンが言うところによると、私の家の義姉妹が私にエチソをかけている。彼女は私に若い頃から恋をしていたが、私は彼女に関心を寄せなかった。彼女によると、私に復讐するために私の兄と結婚したが、兄とうまくいかないので、弟である私にエチソをかけて、私を彼女の思いどおりにしようとしている。…」（Ｄ－26）

「…兄は一人の性質の悪い女性と深い仲になり、ある時金を無心されるが、それを断ったためにエチソをかけられてしまった。…」（Ｄ－30）

④相続問題

「…妹の死をメンに占ってもらったら、エチソによる死であることが判明する。エチソをかけたのは、妹と同じ家に住み一緒に生活をしている人たちであり、妹を家から追い出したいと謀っていたのであった。なぜなら、妹の義理の母が死ぬとき、財産の一部が妹に渡ることになっていたからである。…」（Ｄ－29）

⑤秘密保持

「…息子をエチソで失う。エチソをかけたのは妻であった。結婚以来、息子は妻に甘く、したい放題させていた。息子が農作業に打ち込んでいる間、妻は商売をしていたが、そのうちに売春をし始める。そのことを息子に知られたくなくて、息子にエチソをかけ、息子の気が狂い、売春のことが話題にのぼることのないようにしたのだった。突然、息子は、朝方から一人でいて、自分の家の前を通りかかる人には誰彼かまわず石や埃を投げつけるようになった。息子は人を怖がるようになった。そこで隣接村落のメンに相談をした。…」（Ｄ－28）

⑥エチソへのエチソ

「…エチソのことでメンに相談する。メンを信じ込んでいたから。母が死んだとき、母が他人にエチソをかけたからだという風評が立った。母が清涼飲料水の中にエチソの粉を入れてある女性に飲ませたから、その仕返しにあったのだとされた。そこで女メンに相談した。母は事実エチソを行い、その女性は死んだが、母がエチソをかけたことが判明し、そのエチソに対してエチソがかけられ母の死因となったことが告げられた。母のエチソを看破したのもメンであった。…」（Ｄ－17）

①から⑥は他人をマイナスの状態に陥れる行為であるが、エチソには次に示す事例のような恋愛関係の成立を動機とするものも存在する。この場面でも、かけられる人はかける人に対して恋愛関係をもっていないので、エチソの効果で恋愛が樹立しても、結果的にはその関係は破綻する場合もある。

「…娘の頃から恋人を沢山持っていた。そのうちの一人である現在の夫に、粉でエチソをかけられていること、粉を本人の通る道に仕掛けておいて、それを踏み越えさせて彼を好きにならせようとしていることをメンに教えられる。知らない間に彼を好きになっていたが、彼から離れるようにとメンに言われる。その指示にしたがったが、二回目のエチソをかけられる。…」（Ｄ－19）

「…女メンに頼んで、別れた夫にエチソをかけた。その男と結婚するために、女メンが作ったエチ

ソのための粉を男の手、肩、髪にふりかけて、自分を好きにならせようとした。火曜と金曜には家庭祭壇にローソクを点し、花を捧げてエチソが効くようにした。しかし、女メンはエチソの効果については、何も教えてくれなかった。何とか結婚をし、５人の子供を生んだが、夫の自分への愛は本心からでなかったことが分かったが、エチソをかける金がなかったので夫と別れた。…」（Ｄ－20）

エチソの動機は、それをかける本人が何らかの意味で関係を保っている人間を病気あるいは異常な状態に陥れることで、その人間関係を変化させることである。そこで、エチソはＤ－26、Ｄ－28、Ｄ－29に見られるように、家族内においてもかけられる可能性を含んでいる。Ｄ－26、Ｄ－29では、義兄弟姉妹間、Ｄ－28では夫婦間でエチソがかけられ、二人のエチソによる死者を出している。

（３）方法と対応策

エチソのかけ方には、①頭痛を与えて病気にする、②熱を与えて病気にする、③恐怖を与える、④反社会的行為をやめさせる、⑤身動きができなくする、などがある。

①頭痛を与えて病気にする

「…誰かに頭痛を与えるためには、一個のグラス、油、９つの髪留めピン、ナン（*Nun*）という植物の刺９つを用意する。エチソをかける人の名前を書いて、髪留めピン一本とナンの刺一本で十字架を作り、グラスの底に油と一緒に置き、燃やす。これを９日間続ける。エチソの対象者は１日目から頭痛を被りだす。…」（マニのメン）

②熱を与えて病気にする

「…熱を与えるエチソには、グラス一個、油、唐辛子９個を用意する。９個の唐辛子は、それぞれ別々の家から買う。その唐辛子を焼いて砕く。紙片にエチソの対象の名前を書いて、グラスの底に置いて、油と唐辛子をそこで18日間燃やす。…」（マニのメン）

③恐怖を与える

「…幼児で死んだ人の肋骨を取り出して寸断する。エチソの対象となる人物名を書き、その名前の上に先の肋骨を置き、油を少々加えて燃やす。エチソをかけられた人物は、恐怖を感じ始める。…」（マニのメン）

④反社会的行為をやめさせる

「…墓に行って、死者の埋められている場所の土を一握り取る。その土は、全部で９人の死者から

集められなければならない。その土を器に入れて、エチソをかける人物名をその土の上に書き、油を加えて焼く。エチソをかけられた人物は、ひどくおびえだし、人に悪いことをしなくなる。…」（マニのメン）

⑤身動きができなくする

「…墓から取ってきた土で、エチソをかける人物の戸口に十字を作る。この十字を本人が飛び越えるとエチソがかかり、自分の家から外に出られなくなる。…」（マニのメン）

メンによるエチソの方法は、墓（土、死者）[9]、９という数字、十字架、唐辛子、植物の刺、名前を重要な隠喩的要素として含みながら、発話行為を伴わずにその効力を意図することである。エチソは相手を死にいたらしめることにもなるが、エチソによる死は異常な出来事を伴うことがある。

「…ついにペト（Peto　地域名）まで出かけて行き、そこのメンに診てもらったところ、母にはエチソがかけられていたことが分かった。そこで、遅すぎて治療ができない、とメンに言われる。母が死んだとき、一匹の蛇が彼女の腹の上にいたこと、二匹のイグアナが彼女のハンモックの腕にいたこと、母の腹が異常に膨れて棺を閉めることができなかったことなど、奇妙な出来事がつづいた。…」（Ｄ－22）

「…生まれてくることができなった娘の赤ん坊の遺骸を調べたところ、頭は通常の半分の大きさの半分で、真っ黒な色をしていた。…」（Ｄ－27）

「…遺骸を掘り起こしたとき、柩の中から一本の紐が出てきた。…」（Ｄ－30）

メンは、事例１にも「…メンのくれた薬を用意しようとして紙袋を開けると、中は全て毛の生えた黒い蛆虫だらけで、虫たちは呻き声を上げていました。…」とあるように、動物や神秘的な動物を操ったり、それらに成り変わってエチソをかけるし、エチソを解くと信じられている。

「…女はエチソの効果がなかったことを知ると、今度は別のエチソ、すなわち小山羊（*chivo*）の形をした人間動物（*vay*）で行く手を遮ったり、脅かすようになった。…」（Ｄ－21）

「…母が死んだとき、一匹の蛇が彼女の腹の上にいたこと、二匹のイグアナが彼女のハンモックの腕にいたこと…」（Ｄ－22）

「…ママ（村の名前）の女メンから、エチソから解かれるための薬をもらって飲み続けた。９日間

吐き続け、毎日虫を吐いた。虫を吐き出してからすっかりよくなった。…」（Ｄ－23）

「…エチソに使われる人間動物であるウワイが侵入し、服を取って、人間の糞でそれを汚したことがあった。翌日目をさますと、兄は糞塗れであったので、服を脱がすと、服は血で汚れていた。兄が食事をとろうとすると、碗に一匹の虫が入っていたので、それを取り除いて食べようとすると、もう一匹虫が入っていた。虫を除いても除いてもいなくならないので、兄は食事をとらなくなり、ついに死んでしまった。…」（Ｄ－30）

「…ここでもエチソと判明しましたが、治療方法が薬を使わない治療と聞かされて、このメンに世話になることにしました。このメンは薬は使いませんでしたが、サカップ（*sakap'* 供物と祈りからなるマヤの伝統儀礼）はしました。彼のサカップは、トウモロコシを最初に鳩、次に蝙蝠、最後に蛇の格好をして啄ばむ仕方で行われました。彼によると、こうすることで母からエチソを切り離せる、ということでした。この治療を９回繰り返して、母はエチソから解かれました。…」（Ｄ－38）

「…ユカタンのテカッシュ（Tekax）から訪ねてきた女性の甲状腺腫を霊媒（*santiguaciones espiritista*）で治療をし、女性から沢山の虫を取り出し、それらを真新しい布に集めました。女性は甲状腺腫と診断されていたのですが、実は敵からかけられたエチソだったのです。…」（Ｄ－１）

「…エチソをかけられていると診断された。敵はいなかったから信じなかった。しかし、真偽を確かめたかったために、メンに指示されたルダ３葉、バラの枝２本、ローソク５本、香３束を買った。それらを持ってメンのところに行くと、卵を一個本人の上に、別の一個を台の下に置いて、メンは「パーテルノステル」「信仰告白」の祈りを唱え始めた。祈りが終わると、台の下に置いていた卵を割るように言われた。二つ目の卵を割ると、卵白が混ぜ合わされて、その中に馬の毛のようなもので作った鳥の巣が置かれた。…」（Ｄ－33）

虫や動物を介しない場合は、ピンや刺状のものを身体から取り除くことによってエチソを解く[10]。

「…そこでエチソがかけられていることが判明する。７週間かけて、頭にあったピン状のもの９本と、手に刺さっていた刺状のもの９本を取り除いて、夫は病気から立ち直った。…」（Ｄ－35）

エチソを解く場合も、メンによって祈りが誦せられる。

父なる神よ、この「某」の身体を治してください。
この人を悪くしているエチソと風（*leex baxa'olal iko'bo*）と悪い霊（*ka'kax Pixanoobo*）からお治しください。
父なる神よ、苦しんでいるあなたの子供の此処に（＝患部を指摘する）悪いものを残したままにしないでください。
父なる神よ、あなたの恵み深き聖母マリアに、火曜と金曜に、この人の身体を治してくださるよう乞い願い上げます。
父なる神よ、悪い風（*ka'kax iko'bo*）を抑えて、この罪深き人の此処（＝患部を指摘する）に悪いことをしているものからこの人をお救いください。
父なる神よ、父なる神よ、この人をこのエチソからお救いくださっている父なる神よ、罪深いこの人のこの悪いところから悪い風を取り除いてください。

メンがエチソを解く事実に関して注意すべきことの一つは、エチソを解く行為が他村落のメンによってなされている傾向が存在することである。38事例中９例（Ｄ－４：16：18：22：23：24：28：35：38）が他村落のメンに依頼がなされているのだが、その全てがエチソに関連している。メンをとおして、マニの村は他の村落に対して開かれている側面をもっている。

３　メンと予言

マニにおける奇跡的事象の多くがメンとの関連で語られる事実を、病気治療の場面で取り出した。ここで、メンを奇跡的な事象と結びつけている因子を、予言に関する事例の中から抽出していく。

奇跡的な事象をメンをとおしてマニの人々が語る場面で、色濃く出てくるのが予言に関わる内容である。予言の物的手段にはガラス玉あるいはトウモロコシ（３粒）が使用される[11]。

「…子供の頃から何も手に入れてこなかったが、大人になって結婚したら、多くのものを獲得することができ、成功した人生を送ることができるであろう、という予言であった。当初は信じられなかったが、その後の人生を見てそれが間違ってなかったことを知った。…」（Ｄ－36）

「…６人の子供に恵まれるが、その内の一人が彼女を母と認めず、彼女を苦しめるだろう。また、５人の子供のうちの一人の娘が、他の子供たちよりも彼女になつくであろう、とメンに人生を占われる。…」（Ｄ－２）

「…メンは診断をするとき、病気を治せるかどうかを必ず言う。また、治療の前に人々が言っていることを、全て言い当てる。メンの言うことは、神のお告げ（*oraculo*）なのだ。男や夫がメンを信じていないと、治療に先立って、あなたの夫はメンを信じていないが、どうしてここに来るのだ、と指摘する。あるいは、誰かが自分を信じていない、ときっぱり言う。…」（Ｄ－２）

「…メンは治療できるときはできる、できないときはできないと言う。嘔吐、下痢をいつも治してもらう。…」（Ｄ－４）

「…メンは治療できるかできないか明言する。メンが治療できないときは、医者に連れて行く。…」（Ｄ－８）

「…息子が病気になったとき診てもらったら、息子は不治の病に罹っているから治療は不可能だ、と明言される。医者に診てもらったら、白血病であった。一週間後に息子は死んだ。このように、メンは真実を語るから信じる。…」（Ｄ－17）

「…娘の病気は邪眼（*mal de ojo*）の結果だ、と言われました。彼女が見た人物の諸特徴を私に言い、その時刻、そしてその時私が何をしていたかを言いました。どのようにして私の娘に病気がふりかかってきたかを正確に言いましたので、私はメンを信じ、娘を治してくれるよう頼みました。…」（Ｄ－９）

「…私の娘を「交霊」で治療しながら、メンは私に、娘はパパイアを食べたので病気になった、と言いました。私はメンを信じました。なぜなら、娘が病気になった日に起こったことを正確に私に言ったからです。その日、私は水を運んでおりました。パパイアを少し貰いましたので、家に持って帰り、家に帰り着くと上の娘にやりました。そして、少ししかないから、また、寝ているから、下の娘にはやらないようにと、言いました。しかし、メンによれば、上の娘は私の言うことを聞かずに、下の娘にパパイアをやったのです。そのパパイアが娘の腹を驚かせたために、嘔吐が生じたのでした。
また、メンは私が娘を医者に連れて行ったことも言いました。メンが私に言った全てのことは真実で、私を驚かせました。メンが私の娘に与えた薬を私が娘に与えた時、娘の糞の中にパパイアの何片かが混じっていた時は、もっと驚きました。…」（Ｄ－11）

「…妹の嘔吐と下痢は一つの悪（*un mal*）が原因で、今は嘔吐と下痢を示しているが、もう少しすると過度の熱を彼女に示すであろう。その悪は、妹が死んだ母の霊（*espiritu*）によって連れて行かれることを保証しているし、もし、そのとおりであれば、それは妹をひどく扱ったからである。彼も、その他の誰もそれを解決することはできない、妹は死ぬ運命にあるのだから、とメンは言いました。この時は、誰もメンを信じませんでした。妹をツァーン（Dzan　地名）に住んでいる私たちの叔父のところに連れて行きました。叔父は伝統医（*médico tradicional*）でした。彼の医療に関する知識は、研究なしの経験で得られたものであるからです。が、今日まで大変腕のよい医者で、殆ど全ての病気を治すことができます。しかし、不幸なことに、その叔父も妹を治すことはできませんでした。発熱し、８日後には妹は死にました。このようなことがあった後、メンをますます信じるようになりました。私の妹の死について、本当のことを言ったからです。妹の死に先立って、妹は死んだ母の所に行くのだし、妹を連れて行くのは母なのだから、私たちに心配しないように言ったからです。…」（Ｄ－18）

「…ある時、メンに次のように言われたことがあります。私は目の青いハンサムな男と駆け落ち婚（*pudz*）をするであろう、しかし、私の夫の身体のために貧しく暮らすであろう、彼は他の女性たちと関係を持つだろう、私の生活は私の息子たちが大きくなった時に良くなるだろう。
こう言われるや否や、私は一人のハンサムな男と駆け落ちしました。しかし、彼は沢山の女性がいたにもかかわらず、私は自分で自分の生活を賄わなければなりませんでした。私は子どもたちとともに、辛い目に会わされておりました。娘の一人を私の母の所に送るほどまでになっておりました。いつまでたっても私の夫は変わりませんでした。私はまた娘を一人私の母の所に送りました。そして、とうとう神の働き（*por obra Dios*）によって、夫は病気になりました。彼はマラリアになったのです。彼の女たちは彼の世話をしませんでした。その時になって初めて、彼は私の所に戻って来て、人が変わりました。私の生活が良くなるという予言については、確かにそうなりました。…」（Ｄ－10）「…私の子どもたちについても、メンは次のように言いました。私は沢山の子どもを持つだろうが、子どもたちが大きくなったときに、私の生活は変わるだろう、私の子どもの末っ子の印は、髪の毛のカールした子どもを持った時である。その子は夫にそっくりであろう。私の子どもで５歳になる末っ子は、夫にそっくりです。…」（Ｄ－10）

「…娘は24時間行方不明になっておりました。娘のために*tich'k'aak*（ガラス玉による占い）をしてもらいにメンの所へ出かけた時に、娘の見つかる可能性は殆どないので、娘の場合は難しいと言った。もう一度行った時に、娘は行方不明になってからちょうど24時間後に見つかるだろう、と言いました。…娘が行方不明になってちょうど24時間たった８月15日土曜日午後６時になっても、何も起こりませんでした。メンはただ次のように言いました。「娘は一人で夜を過ごしていない、大きい黒い犬が一緒で、ひっきりなしに娘の両足から流れている血をなめてやっている。そして娘が腹がへったり、喉が渇いたりした時は、セイヨースモモを食べ、水が一杯入った水盤（*pileta*）の水を飲んでいる…。」（Ｄ－３）

「…神のお告げをよんで（*al leer en su oraculo*）私の将来を占う時に、私は処女で結婚することはないであろう、もしそうでなければ、駆け落ち婚（*pudz*）をするであろうと言われました。その時は、私はただ笑っておりました。と言うのは、メンを信じていなかったからです。私がメンの所に行った時は16になったばかりでしたが、時が経つにつれて、そこで言われたことを忘れてしまいました。私には沢山の恋人がおりました。知らないうちに彼のことが好きになりました。また、彼は貧しくて、私たちが結婚するためのお金を自由にすることができず、私に駆け落ち婚を申し込んできましたので、そうしました。私の両親に彼は気に入ってもらえていませんでしたので、彼と駆け落ち婚をすることを受け入れました。６カ月経って、私が妊娠していることがわかった時、メンが言ったことが思い出されました。…」（Ｄ－６）

「…しかし、息子には十分注意するようにメンに言われました。なぜなら、メンの占いによると、さらに多くのことを修得するために、再び行方をくらますかもしれないから、と言われました。メンによると、山の偉大な神々（*los grandes Dioses del monte*）が薬草による治療を教えるために、彼を連れて行ったのだからだそうです。息子は偉大なメンとなって帰ってくるかも知れない、あるいは、死んでしまうかも知れない、とメンは言いました。そして、第３の選択肢もあり、それは息子の従兄弟の一人が、彼の代わりに行方不明になることだとも言われました。しかし、これは息子が17か18よりも大きくなった時に起こるであろう、息子がこの歳を過ぎて何も起こらないならば、息子は治ったのだろうと言われました。…」（Ｄ－16）

上記の事例のように、病気の原因（Ｄ－11）、行方不明（Ｄ－３：Ｄ－６）、駆け落ち婚（*pudz*）（Ｄ－６：Ｄ－10）、将来の生活状況（Ｄ－10：Ｄ－36）、死（Ｄ－18）、ある時点での行動（Ｄ９）、病気治療の可能性と不可能性（Ｄ－４：Ｄ－８）、メンへの不信頼（Ｄ－２）を相談者に的確と評価される程度に予言する力は、メンへの信頼の中心的な因子である。

メンの予言は、Ｄ－36：Ｄ－２：Ｄ－11のように、個人の現実の生活の実態に精通し、人々の過去の生活とか、夫からのメンに対する不信頼なども的確に看破する。Ｄ－２：Ｄ－９：Ｄ－11：Ｄ－10：Ｄ－６においては、将来授かる子供の数と子供の諸特徴、依頼者が出会った人物の諸特徴、依頼者の特定の日時の行動内容の細部、恋人の諸特徴と結婚形態（処女婚か駆け落ち婚かなど）が依頼者を驚愕させる程度に正確に予言されている。行方不明についても、場所、時刻、行方不明者の行動内容を細かく予言し（Ｄ－３）、将来の行方不明を予言し、その結果を３通りに記述してもいる（Ｄ－16）。霊に関する事柄にも言及し（Ｄ－18）、死の予告も的中させたと評価されている。また、Ｄ－４：Ｄ－８：Ｄ－17に見られるように、治療可能性を明言するのもメンの態度の一特徴である。

事例の中にも散見されるように、上述のようなメンの細部にわたる予言が契機になって、メンを信ずるようになるし、それまで以上にメンへの信頼度が高くなるといわれている。

しかしその一方でメンの予言の失敗が語られ、メンに関する悪い風評が存在しているのも事実

である。

「…メンは診断を間違うときもある。ある時腹が膨らんできたので相談したら、それを治療することはできないといわれる。アキル（Akil　地名）のメンに相談したら、エチソだと判明し、戸口にしかけられたエチソの粉を飛び越えたので妊娠したかのようになったと診断され、治療でエチソを解いてもらう。…」（Ｄ－４）

「…一度、すばらしい結婚をすると予告されるが、実は真反対であった。男４人、女４人の子に恵まれたが、子供たちが成長するにしたがって、些細なことでもめ事が絶えないので病気になってしまった。ノイローゼになってしまった。メンの言うとおりにはならなかった。…」（Ｄ－31）

「…息子が病気になって医者に診てもらったが、回復しないので、メンに診てもらったら、住んでいる土地が悪く、そこから病因が来ている。何か金目のものを払えば治療するとのことだったので、首飾りを渡したが、それは患者を自分のところにいつまでも引き止めて置くための手段であった。メンはぺてん師であった。夫が裁判に持ち込むと威嚇すると、首飾りは返却されたが、病気は別のメンに治してもらった。人の弱みに付け込む悪いメンもいる。…」（Ｄ－37）

４　メンと女性

メンをとおして語られる奇跡的な事柄には女性の方がより多く関わっている。38の事例は24名の女性から蒐集されたという事実そのものが、女性によるメンへのより深い関わりの一端を暗示しているであろう。さらに、38事例の中には、男性（夫や男性の親戚など）がメンに不信頼を示す場面が散見される。

「…息子の邪眼をメンに治療してもらう。夫がメンを信じていなかったが、息子の容態が嘔吐と下痢で重体になると、メンの治療を認めざるをえなくなった。…」（Ｄ－５）

「…息子が生まれて４カ月経った頃に、吐いて下痢をしますので、夫にメンの所に連れて行く必要があると言いますと、夫は大いに不快になりました。夫はメンを信じていないからです。しかし、彼の意向に反して、息子をメンの所に連れて行きましたところ、息子はよくなりました。ただ、９度にわたる祈りによる治療で治りました。私の夫には知らせることなく、私の子供の６人がメンのお世話になりました。子供が病気になる度に、６人の子供を治してくれたのですから、メンを信じています。…」（Ｄ－６）

「…娘のマルセリーナが病気の時に、メンの所に駆けつけました。当初、夫は嫌がったのですが。夫はメンを信じていなかったからです。娘の病気は嘔吐でした。この嘔吐は夜の11時に始まりました。この瞬間から、メンの所に連れて行きたかったのですが、夫はそれを欲しませんでした。夜が明けたとき、メンの所に連れて行く代わりに医者に連れて行きました。この医者が私たちに吐き気止めとシロップを与えました。娘の吐き気を止めるためにです。しかし吐く度に少しも良くなりませんでした。吐く度に、決められた量に従って、吐き気止めとシロップを娘に与えましたが、嘔吐は止まる代わりにますます激しくなりました。そこで、医者に娘を連れて行った日の午後６時頃に、夫の承諾をとりつけてメンの所に連れて行きました。…」（Ｄ－11）

「…メンは、父が収穫を全部なくして一文無しになるように、と誰かが母にエチソをかけ粉を飛び越えさせたのだ、と言った。それを父に伝えましたが、父はそれを受け入れませんでした。エチソを信じていなかったからです。…」（Ｄ－38）

これらの事例には、子供が重体になることによって初めてメンを頼る父親（Ｄ－５）、メンを信じない夫にかくれて子供たちをメンのところに連れてゆく母親（Ｄ－６）、医者の治療に効果がないことでメンへの相談を渋々承諾する父親（Ｄ－11）、妻がエチソだと診断されてもメンを頼ろうとしない夫（Ｄ－38）が登場する。

事例１（Ｄ－16）においても、義父がメンを信じていないので、仕方なく医者に娘を連れていく場面がある。しかもこの家族は、メンから渡された薬に虫が入っていた事実を、メンを信じないで医者に診てもらったことへのメンからの報復と解釈している。

38の事例の中には、医者に診てもらったが快復しないのでメンに相談をする例が６例存在する。３例がエチソ（Ｄ－16：Ｄ－35：Ｄ－38）、他は嘔吐（Ｄ－11）、邪眼（Ｄ－13）、土地が病因となっている病気（Ｄ－37）がそれぞれ１例となっている。医者だけでメンに診てもらわなかったことを後悔した例（Ｄ－27）も１例ある[12]。

「…メンを信じなかったことを後悔した。なぜなら、娘が病気がちになり食事をとらなくなったとき、医者に連れていくばかりでメンに診てもらうことがなかったからだ。…」（Ｄ－27）

メンによる奇跡的な出来事をより多くの感情を込めて語るのは、マニにおいては女性である。男性からは、間接的な話は聴き取ることができるが、自分の体験として語られる事例が殆どない。また、上記の事例にもあるように、妻が「夫はメンを信じていない」「メンの所に私が行くことを嫌う」という発言を頻繁にする。

おわりに

マヤユカテカの一村落マニで人々が奇跡的な事柄として解釈する内容は、メンに関わるものと、神と聖像に関わるものとからなっている。ここでは前者だけを取り上げた。

メンをとおして語られる奇跡的な事柄は、病気治療とエチソに最も深く関連する。メンは祈りと治療によって、腹痛、頭痛、歯痛、下痢、緑の便、嘔吐、痒み、アルコール依存症、夜泣きを治癒させる。メンの治療行為の評価を特別に高めている事実は邪眼である。邪眼は妊婦、外で働いてかえってきたばかりの男、酔っぱらいなどとの接触によって引き起こされるので、その事例はマニで頻出する。邪眼はメンだけが診断と治療ができるとされていて、医者はそれを治せないと信じられている。

メンは人間だけでなく家禽類や家畜の不調も治すことができる。マニの人々は各自の敷地内に鶏、七面鳥、豚、牛などを飼って、自分の食用にあるいは医療代の補助に供している。それらが病気になったり死んだりするときの相談は、メンに向けられる。家禽類や家畜の不調や死の原因はメンによると、土地や畑や家が病気（*kojan*）であるから、と解釈される場合が多い。土地や畑や家の病気は、そこに関係する人や動物を不調にし、死に至らせ、そこでの生産活動を不振に陥らせる。メンはそうした空間の病気を治し、人々や動物を望ましい状態に立ち直らせることができると人々に信じられている。

人々や家畜や田畑などの病気の原因はメンによって「悪い風」に帰せられることが多い。メンは病因としての「悪い風」を看破することができ、それを取り除くことができる唯一の存在である。メンが「悪い風」に対処する手段は、祈りと二三の物的手段、例えば、洞察用のガラス玉と処方用の薬草類などである。祈りはマヤ語で誦せられ、マニの人々はその意味は分からないし、知ろうともしない。

この祈りの中で、メンは12の風と32の神的な存在を喚び起こし、祭壇に迎え入れ、供物を捧げ、最後にはそれらの存在を送り返す。この儀礼はメンだけが行うことができ、マニの一般の人々はメンのその力を信頼する。メンは薬草の処方に精通していて、治療中にどのような薬で対処するかを感知し、山中に出かけそれらの原料を採集する。この薬草に関する大量の知識とそれらの多種多様な処方が人々を圧倒する。一人のメンは200種以上の薬草を熟知しているという。また、治療の最中に、「死者となったメン」と声色を変えてやりとりをしたり、９回の治療を終了した時点で行われる鶏を使った象徴的行為（ケーシュと呼ばれる）などがメンの神秘性や呪術性を高めている。

メンは頼まれて邪術をかけたり、邪術を解いたりする。メンは病気を治す存在でもあるが、邪術を媒介にして人々を病気にする存在でもある。邪術は経済的成功や円満な家庭生活への嫉妬、人間関係から来る遺恨、男女関係にまつわるもつれ、財産相続の係争、エチソへの対抗手段などを契機としてかけられる。エチソは家族親族内でかけられる場合もあり、家族や親族を出た範囲でか

けられる場合もある。さらに、邪術が効果をもった場合に結果する異常な出来事（例えば、動物や虫が人の行動を遮ったり邪魔したりする）、異常死（例えば、遺体に蛇やイグアナがいたり、柩の中から紐が出てきたりする）、ならびに邪術をかけるときと解くときにメンが使用する特異な手段（例えば、幼児で死んだ人の肋骨や墓の土や死者の履き物）などが、メンの呪術性を強めている。邪術とともに、メンの発する予言も、マニの人々にメンへの信頼の基盤を築かせている。メンの予言は病気治療の可能性や不可能性、近い将来の生活状況、結婚の形態、行方不明者や紛失物の発見、男女関係の成り行きや立て直し、アルコール依存症、出産、死など現実の生活の多様な局面に関係し、しかも数字、日時、時刻、方角、地点、動物、行動内容について細部にわたる明確な言及をする。その予言内容が依頼者の現実の生活の中で確認されていく中で、メンの奇跡性は高められていく。

メンをとおして語られる奇跡的な出来事は、村境を越えて展開する一面ももっている。マニでメンをめぐる出来事を語る人の話の内容には、隣接する村落のメンの登場する場合がある。「他の村のメンの方が優れている」という人もいるし、事例でも取り上げたように、人々は自分の村落のメンだけでなく他村落のメンに相談に行く。特に、邪術の場合は、その傾向が高くなる。マニはメンをとおしても他村落に対して開かれているのである。

マニにおいては、奇跡に関する出来事は教会とメンをとおして解釈される。

注

1　拙論「マヤユカテカの一村落マニにおける聖像と病気」『メキシコにおける宗教と法と医療の統合的様態の分析的研究』1990年度国際学術研究調査報告　研究代表者　野村暢清　pp. 91-123 参照

2　拙論「ユカタンの一村落マニにおけるメン（呪医＝祭司）と雨乞いの儀礼（*ch'achac*）について」『南部メキシコ村落におけるカトリック系文化の研究（Ⅳ）』1985年度メキシコ海外学術調査報告　研究代表者　野村暢清　pp. 225-254　参照

拙論「メリダ周辺地域マニにおける「熱い」／「冷たい」・二分法とメン（呪医＝祭司）について」『南部メキシコ村落におけるカトリック系文化の研究（Ⅲ）』1983年度メキシコ海外学術調査報告　研究代表者　野村暢清　pp. 340-377　参照

拙論「マニにおけるメン（呪医＝祭司）と儀礼慣習と擬制的親子関係（*Padrinazgo・Compadrazgo*）」『南部メキシコ村落における宗教と法と現実』1987年度メキシコ海外学術調査報告　研究代表者　野村暢清　pp. 129-150　参照

筆者は、1983年以来取り組んできているマヤ・ユカテカの一カトリック村落マニにおける調査研究を、『メキシコ低地マヤ地域におけるカトリック的宗教文化統合の実証的研究』（日本語）ならびに***A Study of Catholic Culture Integration of Lowland Maya Communities in Mexico***（英語）と題して再考と集大成を行っている。本稿は、その一部をなすものであるために、内容の一部が既に公表（論文および学術大会での口頭発表）したものと重複する部分があること、また、その部分については、引用参考文献に明示することによって責任の所在を明らかにしていること、を予めお断りしておきたい。

3　「…次男が頭痛に苦しむので、メンに相談したら、風が落ちかかっている、しかも本人の家からの風であると言われる。メンは、家の土地が腹を空かしているからサカップの儀礼を行うようにと指示した。…」（D－34）

4　祈りについての試訳は Paulina Balam Gongora と彼女の父親の Aurelio Balam Be の教示に負っている。原資料を記載すべきであるが、紙数の関係で割愛した。別稿に譲りたい。

5　邪眼には、酔っ払いの眼、妊婦の眼、熱をもった人の眼、悪い風の眼がある（D－32）。邪眼の治療は下記の事例のようになされるのが通例である。

「…嘔吐と下痢をメンに治療してもらう。原因は酔っ払いの邪眼と診断される。しかもその酔っ払いは父親である、と告げられる。それまで、医者に相談して来ていたが治らなかったのは、邪眼であったからだと納得する。メンはルダの葉を９枚集め、父親が腹ぺこ喉からからで帰宅したときに、ルダの葉を噛ませ、その後でアグアルディエンテ（マヤの焼酎）を口に含ませ、その焼酎を息子の額と体に吹き掛けること、さらに、息子を布で包み込むことを指示した。そのまま息子が眠り込めば治療が効いたことであるし、そうでないときはその治療を続けるように、と言った。その方法によって息子の病気は治る。…」（D－12）

「…娘が病気のとき、医者に相談するが治らなかったので、メンに診てもらったら、邪眼と診断される。一人の妊婦が家に来たが、その妊婦が娘を抱かなかったので、邪眼を患った。このときは、邪眼を及ぼした本人も一緒に治療を受けるべきだと言われる。ルダの葉18枚、妊婦の尿を使った治療を指示された。妊婦が自分の尿でルダの葉をかきまぜる。娘の頭から足先まで洗ってやる。洗い終わった時点で、娘を布で包む。妊婦の尿を娘に少し飲ませる。この治療で娘はよくなった。…」（D－13）

6　「…山で義理の母と一緒に薪を採っていたとき、風の神に遭って、その場に倒れ込み歩けなくなり、メンに救ってもらった。薪を採っているとき、ことのほか陽射しが強いと感じていたが、そのうち突然渦巻き（*mozon*）として知られている冷たい風が生じた。それを風の神とは知らず、あたかもただ冷たい風が送られて来たかのように感じたため、義理の母にむかって、「いい風ですね。この風が瞬く間になくならないといいですね。私たちのこの暑さが私たちを殺さない前に、また私たちを冷やしてくれるといいですね。」と言った。その言葉を言い終わった途端に、自分は悪寒を感じ、虚脱状態に陥り、その場に倒れこみ動けなくなった。義理の母に付き添われて帰宅し、夫の帰りを待ってメンに治療してもらう。冷たい風は実は風の

神で、その風の神には悪い風が含まれていたことが原因であった。祈りで治療すると、一人で家まで歩いて帰ることができた。…」（Ｄ－14）

「…娘を家に連れて帰った時、熱で燃えるようでしたし、ワンワン泣いておりましたので、メンの所に連れて行きました。彼は娘が負っていた悪い風（*mal viento*）を全て取り除きながら祈って治してくれました。彼によれば、風の神々が娘に治療の仕方を教えるために連れて行かれたのだが、19歳であったために大きくなりすぎていたので、山の神々（*los Dioses del monte*）と会って話をしたことを全て言うことができる。メンは娘に９つの祈りをして完治させてくれました。熱は下がり、傷は癒え、娘はその出来事を忘れ去りました。…」（Ｄ－３）

7　メンが痒みを取る場合は14の薬草を煮て処方したものを患部に適用する。腹痛は、サリタソウ、ハッカ、イエルバブエナ（シソ科の薬草）、セイヨウヤマハッカを煮て処方したものを患者に飲ませる。大酒のみは飲み薬で治す。本人の家の戸口の土と９匹の虫を混ぜて焼き、粉薬を作って、本人が泥酔した時に飲ませる。
女癖の悪いのは次の事例のように治療する。

「…２度目にメンの所に行ったのは、私の夫が非常に女たらしであることをやめさせるために、メンの支えを頼むためでした。彼は非常に沢山の女がいたので、子どもたちを養うのが十分ではありませんでした。私に使うように言われたいくつかの薬と、夫につけるように言われたいくつかの薬で、夫は他の女の所に行くようなことはなくなり、今日まで私に忠誠です。…」（Ｄ－９）

8「…メンを信じ、娘を治してくれるよう頼みました。祈りで治してもらうために、５日間娘をメンの所に連れて行かなければなりませんでした。１日に２回、それから５日目には、娘の容態をよくしてくれていましたので、若いニワトリを一羽持って行きました。私は ケーシュが何か知りませんでしたので、疑っていましたが、私にそれをメンが詳しく説明してくれた後、そのニワトリを持って行きました。と言うのは、メンによれば、女の子が治される時には、彼は大きいオンドリにならなければならない、また、男の子の時には若いメンドリにならなければならないとのことです。このケーシュは娘を救うためのものであり、娘を完全に治すことを引き受けている神々への食べ物のためのものであるからです。…」（Ｄ－９）

9　墓や死者との関連では死人の影に出会って病気になった事例がある。

「…死人の影（*bulto*）を見て病気になったとき、メンに治してもらった。死者の日（*finados*）にトウモロコシを採りに出かけた際、途中で男の後ろ姿を見かけるが、女一人だったので恐

くて、話し掛けられたときも応答しなかった。すると全身に悪寒を感じたので、帰宅したが、発熱は異常なものだった。夫がメンのところに連れていくと、死人の影を見たことが原因だと判明する。時間がさほど経ってないので治療ができる、まだ死なずにすむと告げられ、18回にわたって治療を受けることになる。治療の最後に、ケーシュをした。生きた鶏を頭の上に置いて治療をしてもらったが、生きた鶏は自分の頭の上で（象徴的に）死に、私は死ぬことなく生き返った。…」（Ｄ－15）

10　エチソの治療の場合に、本人ではなく、本人の服をメンのところに持参してエチソを解いてもらった事例もある。
「…エチソをかけられていると診断された。そこで母親が本人に問いただすが、本人が何も話さないので本人の服をメンのところに持っていって、エチソを解いてもらった。…」（Ｄ－21）

11「…夢見が悪かったので、メンに相談に行った。メンに診てもらう前に、キリストとニーニョ・デ・アトーチャと聖ニコラスに献灯した。メンはトウモロコシの実を３粒使って占ってくれた。診断用の紙の上に、そのトウモロコシを投げるように指示されたので、それに従うと、３粒の様態を診てメンは診断を下した。…」（Ｄ－36）

12　メンが医者に診てもらうように忠告したり、メンが他のメンに相談に行くように指示したりする事例も存在する。

「…病気は治らないので、別のメンに相談したら、医者がその病気を治せるから病院に連れて行くようにと指示されたので、それに従ったら、次男の病気は回復した。すべてのメンがよいとは限らない。なかにはお金儲けのために病気を利用するメンもいる。…」（Ｄ－34）

「…メンは、その病を自分は治せないので他のメンに診てもらうように、と言いました。そこで父は隣のツアーン（Dzan　地名）とママ（Mama　地名）のメンに相談に行きました。…」（Ｄ－38）

文中のＤと数字（例えばＤ－１など）の記号は下記の内容を示している。

Ｄ－１	Maria Eularia Tuz Balam	教師
Ｄ－２	Veronica Balan	主婦　４８歳
Ｄ－３	Arcangel Poot Tzab	農夫　５２歳
Ｄ－４	Betty Tamay Caamal	未婚の母　４９歳

Ｄ－５	Marcelina Chan Mukul	主婦	７８歳
Ｄ－６	Tomasa Tuz Canul	主婦	４６歳
Ｄ－７	Benita Torres	主婦	
Ｄ－８	Madalena Can Ucan	主婦	４１歳
Ｄ－９	Petoronila Pat Gongora	主婦	５１歳
Ｄ－10	Paulina Villacis Tun	主婦	５０歳
Ｄ－11	Cleotilde Poot Interian	農夫	５６歳
Ｄ－12	Maria Luisa Ku	主婦	３２歳
Ｄ－13	Wilma Puc Tzab	主婦	３３歳
Ｄ－14	Guadalupe Can Ucan	主婦	３９歳
Ｄ－15	Braulia Tzab Caamal	主婦	７９歳
Ｄ－16	Magdalena Campos Tzec	主婦	３３歳
Ｄ－17	Virginia Ek Chan	主婦	４８歳
Ｄ－18	Felipa Balam Caamal	農夫	３１歳
Ｄ－19	Selsa Tuz Pinto	主婦	３２歳
Ｄ－20	Elvira Mejilla Torres	主婦	４６歳
Ｄ－21	Juventino Tuz Canul	農夫	３９歳
Ｄ－22	Isolina　Yah Bojorquez	主婦	４９歳
Ｄ－23	Francisco Can Ucan	農夫	３７歳
Ｄ－24	Tiburcio Can Ucan	農夫	５４歳
Ｄ－25	Berta Celis Jimenez	主婦	６２歳
Ｄ－26	Santos Celis Jimenez	農夫	５７歳
Ｄ－27	Juvencia Zalazar	主婦	７１歳
Ｄ－28	Juvencia Zalazar	主婦	７１歳
Ｄ－29	Galdino Pacheco Tuz	農夫	５６歳
Ｄ－30	Ortencia Cab Cab	主婦	８５歳
Ｄ－31	Antonia Parra Caamal	主婦	４８歳
Ｄ－32	Gloria Perrez Dzul	主婦	５１歳
Ｄ－33	Maria Eulalia Tuz	学生	２２歳
Ｄ－34	Betty Tamayo	主婦	５２歳
Ｄ－35	Braulia Tzab	主婦	６３歳
Ｄ－36	Anatolio　Tuz Tun	農夫	８０歳
Ｄ－37	Izabel Tuz	主婦	２７歳
Ｄ－38	Isabel Tuz	主婦	２７歳

（Ｄ-37とＤ-38は、同一人物であるが、聴き取りした内容が異なるので別々に数えた）

引用･参考文献

中別府　温和

1985年　「メリダ周辺地域マニにおける「熱い」／「冷たい」二分法とメン（呪医＝祭司について）」
『南部メキシコ村落におけるカトリック系文化の研究（Ⅲ）』pp.339-377

1987年　「ユカタンの一村落マニにおけるメン（呪医＝祭司）と雨乞いの儀礼（*cha'chac*）について」
『南部メキシコ村落におけるカトリック系文化の研究（Ⅳ）』pp.225-254

1989年　「マニにおけるメン（呪医＝祭司）と儀礼慣習と擬制的親子関係（*padrinazgo-compadrazgo*）」
『南部メキシコ村落における宗教と法と現実』pp.129-150

1991年　「マヤ・ユカテカ地域の一村落マニにおける聖像と病気」
『比較文化研究』10輯　pp.91-123

1993年　「マヤ・ユカテカの一村落マニにおける婚姻形態について―駆け落ち婚（*pudz*）の事例を中心に―」『比較文化研究』15輯　pp.123-149

1995年　「マヤ・ユカテカの一村落マニにおける儀礼的親子関係」
『地域総合研究』５号　pp.53-64
『マヤ・ユカテカの一村落マニにおける奇跡について（１）―メンの病気治療の事例を中心に―』『比較文化研究』17輯　pp.111-152

2007年　「宗教の太古性と残存性に関する一考察―マヤ･カトリック村落マニにおける口頭伝承を材料として―」
『宮崎公立大学人文学部紀要』第15巻第１号　pp.195-232

Harukazu NAKABEPPU

1996　*The Structure and Function of Ritual Kinship in a Maya Yucatecan Catholic Community, MANI.*
Bulletin of the Center for Regional Studies. Vol.6　pp.77-96

2001　*Marriage Form in a Mayayucatecan Catholic Community, Mani―with special reference to Pudz―*
Bulletin of Miyazaki Municipal University Faculty of Humanities. Vol.8 No.1 pp.205-220

2002　*Some Aspects of Social Structure of a Mayayucatecan Catholic Community, Mani.* *Bulletin of Miyazaki Municipal University Faculty of Humanities.* Vol.9 No.1 pp.137-152

2002　*Ritual Kinship and Ejido in a Mayayucatecan Catholic Community, Mani.* pp.228-233